

## 種ってすごいな！ ふたば幼稚園（福岡県福岡市）

[5歳児]

子どもたちの健康を守るために、「食と農と環境」を結び付けて保育を実践している。その活動の中の「生ゴミを堆肥にする 野菜を栽培する 調理して食べる」という取り組みを通して、子どもたちが「どうして？」と思い、不思議さや発見を楽しむ経験をしている場面を捉えた。

### 事例 堆肥作り

堆肥になった生ゴミを畑に入れる時、色がすっかり抜け落ち原形をとどめないみかんの皮を見つけた子どもたちが、「先生、これみかんの皮やろう？」「ぼくのお母さん、これ、ゴミに捨てるよ...、もったいないね」「これ、地球の土になるよね！」などと話す。

生ゴミ堆肥を覆っているビニールシートがふくらんでいる。中の様子を見ると大きな葉が茂っていて、「グッ、不思議！」「これ何の野菜？」と興味をもつ。それが「かぼちゃ」と分かると、「えっ、かぼちゃ！」「どうして出てきたと！」「すごいね！」と不思議がり、大喜びで議論する。

「絶対土の力よね」

「でもどうしてかな？」

「だって、ぼくたちと同じ、体に栄養のある食べ物を食べようけん、大きくなったじゃない」

「ばってん、ゴミに捨てとったら、絶対腐れとったよね！」

「やっぱ、土はえらいね、びっくりしたあ...」

「種ってすごいね！」

「うん、土はえらいね～！」

「そしたら、今度はスイカの種入れとこうか...」

「うん、わたしメロンが好きやけんメロンの種入れろうかいなあ」

「ブドウの種も」「桃の種も」と、それぞれ好きな果物の名前を言う。



### <考察>

- ・ 子どもたちから自然に出てきた「もったいない！」という言葉や思いを大切にする。
- ・ 「生ゴミが栄養のある土になる」という堆肥作りのことを幼児なりに分かって活動しているので、目の前のかぼちゃの芽から、様々なことに不思議さを感じている。
- ・ 腐ってしまうはずのところから芽を出す「種の命」や、種の芽が育つような栄養のある「土の力」に気付き、「すごい！」と感動する姿から、「科学する心」の育ちを捉えることができる。

### <今年栽培した野菜>

（夏野菜）トマト、ピーマン、キュウリ、ニンジン、インゲン

（冬野菜）ダイコン、ホウレンソウ、ニンジン

（春野菜）スナックエンドウ、グリーンピース



### <堆肥作りの流れ>

- ・ 給食（月・水・金）の生ゴミを、当番の幼児が直接給食室で受け取る。
- ・ 密閉容器に移してEM菌を入れて混ぜる。
- ・ 10～14日ほど発酵させ、ゴミの形がなくなってきた頃、プランターの土と混ぜてさらに置く。
- ・ 白カビが生えてきた頃に、野菜を育てる畑の土に混ぜる。



### みどころ

子どもたちが堆肥を作り、そこで芽を伸ばした植物に不思議や疑問を感じ、「種の命」や「土の力」に気付くという大きな「発見」をしています。これは、毎日の生活の中で繰り返している「仕事や作業」の意味が分かり、主体的に取り組んでいるからこそ得られた経験です。このように「科学する心」は、日常生活の中で必要なことや大切さを感じて行動することや、幼児なりにものや生き物が変容していく仕組みを感じて心を動かすことに結びついています。